

りんうんぶんこおもてもん
臨雲文庫表門

市指定有形文化財（建造物）

この門は、元薩摩藩島津公江戸御隠居屋敷の門で、かつて大蔵大臣と日本銀行総裁を歴任した井上準之助氏が所有し、居住していたものです

昭和 10 年 4 月、結城豊太郎先生は、臨雲文庫（現在の結城豊太郎記念館）を建てる際、この門を赤湯東正寺にある裏門と一緒に井上家から譲り受け、解体運搬して現在の地に移築しました。長さ 6 間（1 間＝約 1.8m）、高さ 2 間の門で、通行する幅が 2 間あり、両脇が番所（警護の詰所）になっています。外壁は下見板張り（※1）、小壁は漆喰塗り、屋根は瓦葺きと、どっしりとした風格を持っています。

結城先生には、郷土の青年がこの門をくぐることで、幕末の志士の意気込みを間近に触れてもらいたいという想いがあったのかもしれません。

幕末の薩摩藩は、江戸に拝領屋敷（※2）として上屋敷、中屋敷、下屋敷（※3）を持っていました。隠居した元藩主が住む場所としては、中屋敷か下屋敷が考えられますが、この門は 70 万石余の大きな藩の表門としては、規模が小さ過ぎます。



▲結城豊太郎が井上準之助（元大蔵大臣・日本銀行総裁）から譲り受けた臨雲文庫表門

5 万石以上の国持大名（※4）は、門の梁間を 3 間、また、両潜り門付き（※5）や両門番所を置くことが許されています。しかし、この門は梁間が 2 間で片潜り門付きと、とても質素です。

なぜ、元薩摩藩の門がこのように質素な造りだったのか。

この謎を解く鍵は、東京都の麻生区（現港区）にあった井上準之助氏の旧宅図面にあると、遠藤敦子氏（元結城豊太郎記念館職員）は指摘します。

明治 16 年の地図を見ると、当該地に細長い屋敷があり、道路沿いに表門らしきものが見えます。しかし、文久 2（1862）年の絵図には、4 人の武士の名前が連なっているだけです。

薩摩藩を含め各藩は、拝領屋敷のほかに近郊の屋敷や農地を抱屋敷（※2）として所持しており、その場合は旧所有者の名義するのが通例でした。抱屋敷は、囲いとして門を作ることが許され、隠居所として使われることもありました。御隠居屋敷が抱屋敷であったことも想定されます。

※1＝板の下端がその下の板の上端に重なる張り方。

※2＝江戸藩邸のうち、幕府から与えられた土地に建てた屋敷。抱屋敷は民間の土地を購入して建てた屋敷。

※3＝江戸城に近いものから上、中、下と区別される。

※4＝大名の格式の 1 つで、領地が 1 国以上ある大名。

※5＝潜り門とは、くぐって出入りする小さな門。